

寺本沙也加¹・岩崎秀紀²・照屋清之介³：北海道礼文島におけるタテヨコイトカケ及びミスジヨコイトカケギリの北限打上記録

Sayaka TERAMOTO¹, Hidenori IWASAKI² and Shinnosuke TERUYA³ : Stranding record of *Epitonium eusculptum* and *Cingulina triarata* in Rebun Island, Hokkaido.

はじめに

礼文島は、北海道の北部、稚内の西方60kmの日本海上に位置し、亜寒帯湿潤気候に属している有人島である。リマン海流の影響を受けるため、日中でも気温が下がらず1月～2月の最高気温は-3℃程度である（気象庁ホームページ1）。礼文島付近には対馬暖流が流れ込んでおり、これまでも南方系の生物が度々報告されている（三保・佐藤 2000；中田・佐藤 2002；鈴木・圓谷 2013, 他多数）。しかし、礼文島の貝類相については、まとまった報告は殆ど行われていない状況である。礼文島を含む日本海北部の貝類相としては、ロシア（Kantor & Sysoev 2006）、サハリン（瓜田 1943；山崎ほか 2015）、留萌市（留萌市教育委員会 1986）について知見がある。今回、これらの地域から報告が行われていない小型貝類を採集したので報告する。

採集状況

2014年7月23日、北海道礼文郡礼文町船泊村、礼文神社付近の砂浜にて岩崎によりタテヨコイトカケ1個体、ミスジヨコイトカケギリ2個体の死殻が打上採集された。

Epitonium eusculptum (G. B. Sowerby III, 1903)
タテヨコイトカケ (図1)

特徴：殻長14.8mmで、殻幅は3.9mmである。殻はやや薄質で白色であり、わずかに光沢が認められる。縦肋は板状で、肩部で尖り、縦肋間には細かな螺条が密に並んでいる。殻口の縁部は縦肋で縁取られる。臍孔は閉じる。殻頂部が若干欠けている。

備考：タテヨコイトカケ *Epitonium eusculptum* (G. B. Sowerby III, 1903) は、房総半島・能登半島以南の水深10～30mの砂底に生息する小型のイトカケガイ科の腹足類である（肥後・後藤 1993；土田・長谷川 2017）。これまで、日本海側では能登半島以南から報告されているのみであり、本報告は北限更新にあたりと考えられる。

Cingulina triarata (Pilsbry, 1904)
ミスジヨコイトカケギリ (図2)

特徴：個体Aは、殻長13.0mmで、殻幅は3.0mmである。個体Bは、殻長12.7mmで、殻幅は2.9mmである。殻はやや厚質で白色である。各層の側面は平らで、3本の低く幅広い螺肋を巡らせており、各層の最下部の螺肋が最も幅広くなっている。ただし、螺肋間は非常に狭くなっている。個体Aは殻頂部まで残って殻表には若干の光沢もみられるが、個体Bは殻頂部が欠け摩耗が顕著である。

備考：ミスジヨコイトカケギリ *Cingulina triarata* (Pilsbry, 1904) は、三陸・男鹿半島から九州の、潮間帯から水深150mの砂泥底に生息するトウガタガイ科の腹足類である（肥後・後藤 1993；堀 2017）。前種と同様に、本種も分布の北限記録を更新するものと考えられる。



図1 タテヨコイトカケ *Epitonium eusculptum* の貝殻。スケールは5 mm。



図2 ミスジヨコイトカケギリ *Cingulina triarata* の貝殻。左が個体A、右が個体B。スケールは5 mm。

考察

このような小型貝類が礼文島で見つかった可能性として2パターンが考えられる。1つは、海水温の上昇による温暖化の影響が考えられる。2000年以降、礼文島や利尻島には南方系の生物の漂着が続いており（三保・佐藤 2000；佐藤 2001；中田・佐藤 2002），礼文島には2006年からアオイガイの漂着も報告されている（船木・佐藤 2009；鈴木・藤澤 2011）。また，2014年7月の礼文島沖の海面水温は約19.0℃で，海面水温平年差は1.5℃高温であった（気象庁ホームページ2）。これらのことから，今回確認された小型貝類2種についても温暖化による影響の可能性が唆される。もう1つの可能性として，小型貝類であるために，これまで見落とされていた可能性が考えられる。これについては，詳細な報告が行われていない限り調べることは不可能である。今後，検証を行うためにも，小型貝類も含めた打ち上げ記録の蓄積が望まれる。

引用文献

- 船木梓・佐藤雅彦. 2009. アオイガイ（カイダコ科）の礼文島における記録. 利尻研究, 28, 11-12.
- 肥後俊一・後藤芳央. 1993. 日本及び周辺地域産軟体動物総目録. 854pp. エル貝類出版局, 八尾.
- 堀成夫. 2017. トウガタガイ科. In 奥谷喬司（編著）. 日本近海産貝類図鑑【第二版】. pp.452-466, 1105-1123. 東海大学出版部, 神奈川.
- Kantor, Yu. I. & Sysoev, A. V. 2006. Marine and brackish water Gastropoda of Russia and adjacent countries: an illustrated catalogue. 371pp., 140pl. KMK Scientific Press Ltd, Moscow.
- 気象庁ホームページ1. http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php?prec_no=11&block_no=1546&year=&month=&day=&view=p1
- 気象庁ホームページ2. http://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/db/kaikyo/archive/c_1/jpn_monthly/2014/07/jpn_monthly_sst.html
- 三保尚志・佐藤雅彦. 2000. 利尻町立博物館所蔵ヘビ標本5種の記録. 利尻研究, 19, 11-13.
- 中田淳・佐藤雅彦. 2002. 利尻島におけるソデイカの漂着記録. 利尻研究, 21, 87-91.
- 留萌市教育委員会. 1986. 栄井直蔵氏寄贈貝類標本目録. 58pp. 留萌市教育委員会, 北海道.
- 佐藤雅彦. 2001. 利尻島におけるアカウミガメの漂着記録. 利尻研究, 20, 39-41.
- 鈴木明彦・圓谷昂史. 2013. 北海道礼文島への暖流系巻貝レイシガイの漂着. 漂着物学会誌, 11, 21-22.
- 鈴木明彦・藤澤隆史. 2011. 北海道礼文島へのアオイガイの漂着. 漂着物学会誌, 9, 25-26.
- 土田英治・長谷川和範. 2017. イトカケガイ科. In 奥谷喬司（編著）. 日本近海産貝類図鑑【第二版】. pp.179-191, 889-901. 東海大学出版部, 神奈川.
- 瓜田友衛. 1943. 樺太産貝類目録. 樺太廳博物館報告, 5(1), 155-174.
- 山崎友資・野別貴博・芳賀拓真・千葉普・園田武. 2015. ロシア国サハリン州サハリン島から確認された貝類：特にカモメオオノガイ（新称）とチヂレカモメガイ（新称）について. ちりぼたん, 45(4), 262-283.

(Received Sep. 5, 2017 ; accepted Oct. 15, 2017)

¹ 〒274-8510 千葉県船橋市三山2-2-1 東邦大学理学部生命圏環境科学科

¹ Faculty of Science, Toho University, 2-2-1 Miyama, Funabashi-shi, Chiba 274-8510, Japan

² 〒098-2802 北海道中川郡中川町字中川236-4 中央第2団地2-4

² 2-4 Tyuuou dai 2 danchi, 236-4 Nakagawa, Nakagawa-cho Nakagawa-gun, Hokkaido 098-2802, Japan

³ 〒901-3104 沖縄県久米島町真謝500-1 沖縄県海洋深層水研究所

³ Okinawa Prefectural Deep Sea Water Research Center, 500-1 Maja, Kumejima-cho, Okinawa, 901-3104 Japan